
はじめの
万葉集

萩原昌好 編

中島梨絵 絵

あすなろ書房

籠もよ み籠持ち 堀串もよ
み堀串持ち この岳に 菜摘ます児
家聞かな 名告らさね そらみつ
大和の国は おしなべて われこそ居れ
しきなべて われこそ座せ
われにこそは 告らめ 家をも名をも

卷一・一 雄略天皇

【意訳】

籠も、美しい籠を持ち、堀串（土を掘る道具）もよい堀串を手にして、この丘で菜を摘む娘よ。

家はどこか。名は何というのか。

大和の国はすべてにわたって私がおさめている。私が支配している。

この私にこそは教えてほしい。あなたの家も、そしてその名も。



万葉集筆頭をかざる伝説の天皇のうた

『万葉集』巻一の初めに登場するうたで、雄略天皇とは、五世紀の後半に実在したとされる、第二十一代目の天皇のことです。朝廷制度をはじめて整えた人物とされています。

このうたは、そのものずばり、男性から女性への〈求愛〉です。当時、男性が目をとめた娘の家や名を問うのは、愛情表現であり、「あなたと結婚したい」という気持ちの証でした。しかも問うている男性は、国をおさめるトップである天皇。実に威風堂々とした求愛ぶりです。「この私からの求愛を拒むわけがない」といわんばかりの、ある種の傲慢ささえ感じますね。しかしこのような猛々しさが、逆にこの天皇の、非常に男性的な魅力になっているようにも思えます。相手の女性が天皇に応えたかどうかは、返歌（返し）のうた。返答）がないのでわかりませんが、当時のように天皇が絶対的な存在であった時代、その誘いを拒むなどということは、不可能だったのではないでしょう。

この天皇は、国土を統一した英雄として、『古事記』や『日本書紀』などにも登場し、女性への情愛にからんだいくつかの伝承があります。このうたも、天皇自らがうたったというよりは、『古事記』などに記載されているエピソードをもとに、「天皇の大御歌」として伝えられたのではないかとされています。

どちらにしても、この長大な歌集全巻中の冒頭に、このような男女の愛についてのう

古に 恋ふる鳥かも

※弓弦葉の 御井の上より 鳴き渡り行く

巻二・一一一 弓削皇子

【意訳】

この鳥は、昔を思い慕って鳴く鳥なのだろうか？
今、弓弦葉の御井のほとりをとんでいくではないか。

※我妹子に 恋ひつつあらずは

秋萩の 咲きて散りぬる 花にあらましを

巻二・一二〇 弓削皇子

【意訳】

愛するあなたを恋い焦がれてばかりいないで、
いつそのこと秋の萩のように、
咲いて散ってしまう花でありたいものだ。
生きていても、私を慕ってくれないのだから。

夕さらば 潮満ち来なむ

※住吉の 浅鹿の浦に 玉藻刈りてな

巻二・一二二 弓削皇子

【意訳】

夕刻になれば、潮も満ちてくるだろう。
そうしたら、住吉の浅鹿の浦の玉藻を刈ろうよ。
(時が満ちれば、あなたもその気になってくれるだろう。
浅鹿の玉藻を刈るように
あなたと愛を語りたいものだなあ)。

※弓弦葉：高さ六メートルぐらいにもなる常緑高木。親子草ともいう。

※御井：(おそらく宮中にあった)井戸のこと。

※我妹子：愛しい女性をいう語。

※住吉の浅鹿の浦：今の大阪市住吉区から堺市浅香町あたりにかけての海辺。

※玉藻刈り：玉藻とは海藻のこと。神前に供える海藻をさすことが多い。

はじめの
万葉集
下

萩原昌好 編

中島梨絵 絵

あすなろ書房

『万葉集』をより深く知るために①

『万葉集』には、歌集としての大きな特徴がいくつかあります。

まず一つには、「やまとうた」という独自のうたのスタイルを確立させた画期的な書である、ということです。「やまと」とは、現在の奈良県の旧国名のことですが、同時に「日本」という意味でもあります。そして「うた」がつくと、一般的には、〈五・七・五・七・七の計三十一音を基調とした和歌〉という意味になります。たとえば、次のうたです。

あをによし 奈良の都は

(あおによし ならのみやこは

五 七

咲く花の 薫ふがごとく 今盛りなり

さくはなの おうがごとく いまさかりなり)

五 七 七

(意訳)

青の瓦と朱の柱のはなやかな奈良の都は、
花が咲きにおうように、今、隆盛を極めていくことだ。

これは、小野老(？)七七三年ごろ 下巻 四七頁参照) という奈良時代の歌人のうたです。

小野老はもとは貴族でしたが、後年、大宰府(現在の福岡県太宰府市あたりに置かれた役所)の役人となりました。このうたは、当時の国の中心であった都の美しさをうたっていますが、その裏には、大宰府という僻地の役所に追いやられてしまったわが身へのあわれみと、はなやかな中央へのあこがれがこめられている、ともいわれています。

この小野老の「うた」のような基調にそいながらも、さまざまな音数のバリエーションを持たせた形として、「長歌」(主に五・七をくり返し、七・七で結ぶうた)、「短歌」(五・七・五・七・七の五句でよまれたうた)、「施頭歌」(五・七・七・五・七・七の六句でよまれ、同じリズムをくりかえしたうた)、「仏足石歌」(五・七・五・七・七・七でよまれ、奈良の薬師寺の礎石にさざまれているうた)など、さまざまな形があります。

二つ目は何をうたっているのか、そのうたのテーマです。大きくくりとして、「雑歌」[相聞歌]「挽歌」の三つに分類することができます。

この世の美しさを愛でた人

古来より、靈峰（神々が集う神聖な山）とされ、「不死」「不尽」とも呼ばれた富士山。その美しさを、この二つの歌でうたった山部赤人は、聖武天皇の宮廷に仕えた下級役人であったといわれています。山部という名には、「山林の管理をする」という意味もあり、赤人はその一族であったという説もあります。

天皇が地方を視察される行幸先での旅のうたが多く、中でもこの二首のように、自然情景の美をとらえたものが多くあります。

さて、ここでとりあげた二つの歌。実は、これらは〈対〉の関係にあります。二首合わせてよみこむことで、はじめて歌の総意が読み取れる、というしくみになっているのです。初めの長めのうたを「長歌」、次の短めのうたのことを「反歌」といいます。

この「長歌」は五七調の句をくりかえし、最後は五、七、七で結ぶ形式になっています。荘重な響きと流麗な調べをもつ長歌は、宮廷祭祀など、公の場でうたわれることが多かったとされ、柿本人麻呂（上巻一〇二頁参照）が、その代表的な歌人です。「反歌」とは、長歌の内容を、もう一度短歌でくり返すうたをいい、「返し歌」とも呼ばれます。まず荘重な響きの長歌が重々しくうたわれ、次に短い反歌で簡潔にうたいおさめるという形が、当時のうたのあり方でもありました。長歌と反歌を対にして、うたの「場」が一段と盛りあがるようにしたのです。そして、後に反歌は独立して「短歌」となります。

また、「田子の浦」の反歌は、後世の『新古今和歌集』（鎌倉時代初期に編纂された和歌集）に、少し形を変えてのせられています。

田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ

（意訳）

田子の浦に出て、富士の山を仰ぐと、真白な富士の高嶺に雪が降り続いている。

『万葉集』に掲載されているものとは、微妙に意味が異なっていることがわかりますね。これら二首を、ことばごとに、くらべてみましょう。

「田子の浦ゆ」…（田子の浦から）出て、

「田子の浦に」…（田子の浦に）着いた。

「雪は降りける」…雪が降りつもっている。

「雪は降りつつ」…雪が（今も）降り続いている。

我が園に 梅の花散る ひさかたの
天より雪の 流れ来るかも

巻五・八三二 大伴旅人

【意訳】

我が園の梅林の梅が春風に散る。
天から雪が降って来るのだろうか。



※ ひさかたの：「天」にかかる枕詞。
(上巻二二五頁参照)。

これは、天平二年（七三〇年）の正月十三日に、旅人の屋敷でもよおされた「梅花の宴」という梅を愛でる歌会での一首です。梅は当時、大陸からの外来樹で、非常に貴重なものでした。筑紫は異国との表玄関でしたから、このようなぜいたくな宴も可能だったでしょう。様々な歌人たちが集い、梅見を楽しみました。

「はじめに」でも少し触れましたが、新元号「令和」は、この「梅花の歌三十二首併せて序」のうたの序文が原典とされています。ご紹介しましょう。

時に、初春の令月にして 気淑く風和ぐ。

梅は鏡前の粉を披く、蘭は珮後の香を薫らす。

（意訳）

初春のよき月で、大気は清らかに澄み、風がやわらかくそよいでいる。

梅は、美しい女性の鏡の前の白粉のように美しく咲き、

蘭は、腰にさげた香り袋のように、香り高く香る。

梅花の宴に参加した歌人たちのうたは全三十二首ほどあり、これはその前書きのような意味合いを持つことばで、山上憶良のものともいわれています。このうちの「令」と「和」の二文字から新元号は生まれました。「令」は「法令・命令」といった法律的

君に恋ひきみ こひ いたも術すべなみ 奈良山ならやまの
小松こまつが下したに 立ち嘆なげくかも

巻四・五九三 笠郎女かさのいらつめ

【意訳】

あなたが恋しくて、どうしようもないので、
奈良山の松の樹の下で、嘆き悲しんでいます。

恋こひにもぞ 人ひとは死しにする 水無瀬川みなせがわ
下したゆ我われ瘦やす 月つきに日ひに異けに

巻四・五九八 笠郎女かさのいらつめ

【意訳】

恋いこがれるあまり、死んでしまうこともあるのですよ。
目立たぬ水無瀬川の流れるように、
ひっそりと、日ごと月ごとに痩せおとろえて。

